

「学校のコウモリ(1)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

コウモリは珍しい動物ではない。東京でもごく普通に見られる。本校の校庭でも、夕方になるとエサ(空中の虫)を捕えるために、毎日のようにコウモリの飛翔が見られる。



コウモリは、飛ぶ方向を変えながら、ヒラヒラと飛ぶ。チョウの飛び方に近く、鳥とは明らかにちがうので、簡単に見分けがつく。昼はどこかの「塙」(ねぐら)で過ごしているのだが、時々、我々の前に姿を現すことがある。



先日も、「先生、プレイルームのベランダにコウモリの赤ちゃん、死んでます！」まず、注意しなければいけないのは、絶対に手を触れないこと。コウモリ自

身が病気で、病原菌を持っていることもある。コウモリの糞は、さまざまな病原菌を媒介する。人間の匂いがあると、親元に戻しても育てなくなる。へたに持つと、噛みつかれることもある。



駆けつけてみると、まぎれもなく「コウモリの赤ちゃん」である。死骸ではなく、生きている。ピンセットと比較すると、いかに小さいか理解できるだろう。



ピンセットの先端を後肢に近づけると、自分からしがみついてきた。赤ちゃんと言えども、さすがコウモリだ。後肢でぶら下がる能力はすでに身につけている。



しばらくじっとしていたが、前肢も使って、ピンセットによじ登ってきた。意外にも元気だった。